

スペイン語圏を知る本 (その62)

楠 貞義 著 『現代スペインの経済社会』
(勁草書房 2011年)

評者 安田 圭史

スペインの有力日刊紙『エル・パイス』(2012年2月14日付)に興味深い記事が掲載されていた。首都マドリードで毎年開かれている芸術祭において、今年出品されたある作品が話題になっているという内容であった。気鋭の若手芸術家、エウヘニオ・メリノによって制作されたその作品は、冷凍庫の中に独裁者フランシスコ・フランコ将軍(1939年～1975年在位)のミニチュアが入ったものであった。この衝撃的な作品の作者は、フランコが「凍った幽霊であり、決して消え失せないもの」であることを表現したかったのだという。フランコは36年という政権期の長さから、独裁終焉以降35年以上が経過したスペインにおいても、多くのスペイン人にとってまさに「忘れることのできない」存在である。

本書もフランコ独裁の経済の側面に随所で触れている。第2章では政権初期にスペインから多数の移民が主にヨーロッパの先進国であるフランス、西ドイツ、ベルギーに渡ったことを論じている。当時スペインは、3年の内戦(1936年～1939年)終結直後で多くの人々が飢餓に苦しむ一方、フランコ政権は「独裁」という否定的なイメージから他国からの援助を満足に得ることができず、自給自足経済体制の構築を迫られた。無論その期間、スペインの経済は停滞した。そのような事情から、スペインを出た人々の大半は、仕事を求めた経済移民だったのである(68ページ)。

一方で著者はスペインが次第に移民を送り出す国から受け入れる国に変化してきた面も強調している(第3章)。フランコ政権が1959年に経済社会を対外開放し、1960年代には観光を主要政策として推し進めた結果、ドイツ、イギリス、フランスなどから主に年金生活者がスペインに移住した。実際、フランコ政権が独裁者の死とともに終わりを迎える1975年には、気候が温暖な地中海沿岸地方やカナリア諸島などに約10万

人の人々が移住していたという(91～92ページ)。これらの移民の多くは、物価の安い国で老後生活を過ごそうという目的を持っていた。

さらに本書は、近年スペインへの移民のあり方が大きく変わってきたことも詳述している。2002年に通貨ユーロが市場に流通して以来、スペインが民主化以降最大の繁栄を経験した結果、仕事を求めた経済移民が大挙押し寄せるようになったのである。著者はそれらの移民の特徴を、他のヨーロッパ先進国と比べ、EU域外出身者の比重が高く、中でも歴史的文化的な繋がりから、ラテンアメリカ出身者が多いと説明している(97ページ)。

そして現在、スペインは2008年9月のリーマン・ショックの影響以降、未曾有の経済危機の只中にあるとあってよい。失業率は2007年度の8.3パーセントから2011年度は20.6パーセントまで跳ね上がり、この値は今年度さらに上昇することが予想されている(『エル・パイス』、2012年2月21日付)。先行きが決して明るくない一方で、著者はスペインに渡る移民はそれほど減少しておらず、帰国する移民も多くないと述べている。その主要な理由は、移民の自国と比べ、スペインの状況は彼らにとってみればまだ良好であることと、彼らの大半がスペインで成功して故国の家族を呼び寄せることを目的としているからであるという(108～110ページ)。

フランコ政権期において多くのスペイン人が他のヨーロッパ諸国に見出した道筋を、今度はラテンアメリカを中心とする移民がスペインを目指してたどっている。多数の移民を受け入れる一方で、高い失業率を抱えるスペインは、今回の苦難を果たしてどのように乗り切るのであろうか。「凍った幽霊」も今後のスペインのあり方を冷凍庫から注視しているに違いない。

やすだ けいし (龍谷大学経済学部専任講師・
スペイン現代史、2000年度イスパニア語学科卒業生)